

瀬崎正人 プロフィール

- 1958.8.9 広島県江田島に生まれる。3歳で長崎県佐世保市に転居
(昭和33年)
- 1974.4 佐世保工業高等学校入学。在学一年目に東京へ家出。都会の巨大さに恐れと憧れを抱きつつ、一週間で戻る。
(昭和49年)
- 1977.3 同校卒業。両親の望む道へ進む。しかし、一年目終わり頃目指していたスタントマンの道へ誘う広告を見る。両親の望んだ道を辞める。
- 1978.4 あらゆる反対を押し切ってスタントマンの道に飛び込む。
(昭和53年) NHKドラマ [草燃ゆる]ほか、TBS [ドリフの全員集合] [仮面ライダー]などの殺され役・悪役として出演多数。二年目、日米合作 [THE IVORY APE] (アイボリーエイプ) 撮影のためバミューダ島ロケ。主役の白いゴリラのぬいぐるみ俳優 (スーツアクター) として "ジャック・パランス" とともに共演。ジャックに気に入られる。
帰国後 [ウルトラマン80] として大抜擢を受けるが太ももが太すぎたため撮影直前に降板となり怪獣役に転じる。第三作目の "失恋怪獣ホー" の撮影中にウルトラマンのキックが右目を直撃して失明寸前のけがを負い、水の合わなかった芸能界を去る。
【エピソード《特撮怪獣画家を目指す》】
- 1980.4 夢破れて帰郷。父の興した消毒会社を手伝いながら夜はコックのアルバイトを始める。
(昭和55年)
- 1981.頃 写実的水彩画や粘土レリーフ、作詞・作曲を試みる。
- 1982.12 "人間の幸せの本質" についてインスピレーションを受け、一冊の冊子に纏めるが誰一人の理解も得られず悶々とした日々を送る。
(24歳) 自分の生涯を、その実現のために生きること、とする。
- 1983.2 福岡市美術館にて、一枚の絵 (ホアン・ミロ作) に出逢う。
自分の悩みの元である人間の美しい部分も醜い部分も、神様も悪魔も、その全てを内包して尚、初々しい生き活きとした命のダンスを踊るかのような世界観との出逢いにより、画家として生きることが切望する。
- 同 油彩による "愛" をテーマとした作品を描き出す。
題名は全て [Love composition (ラブコンポジションー愛の構成ー)] とする。
同じ頃、父の仕事並びにコックのアルバイトを辞めウインドディスプレイデザイナーの仕事を得て働き出すがなにかもの足らず、ある日評論家 "小林秀雄" を知り上京を決意する。
- 1985.12 片道切符で上京。コンピュータオペレータの職に就く。
(27歳) 意を決した半年後、銀座の画廊街を初めて歩き絶望感を味わう。
しかし、最後に訪れた [ギャラリー K] にてオーナー・作家U氏と出逢う。
そこで、小林秀雄が故人であることを知ることになるが、後に『小林秀雄論』を著すことになるU氏との出逢いにより、[ギャラリー K] は次第に活動の拠点となる。

1986. 頃 [ギャラリー K]初の個展の折、ある方より「君は、自分では“愛”を描いているつもりらしいが、よく見てご覧。君の絵の中にある色という色は互いに噛みつきあい、殺し合っているのが解らないのか…此处にあるのは愛などではない…僕に言わせれば、此处は墓場だ！」—しかし、この言葉は、実はその時の自分が一番望んでいた、自分という壁を破るためのものだった。
その後、ある方は「…何故あそこまで辛辣な言葉が出てきたのか自分にも解らない」と述懐された。
この時以降“色”という問題と向き合うことになる。

～この間、個展5回、グループ展多数、日常の中に実践的に芸術表現を取り入れる試みに携わる。しかし、自己に盲目となり過ぎたため数々のサラ金より金を借り、サラ金地獄に堕ちる。

2
(28~34歳) バブル崩壊後、収入源であった不動産会社を辞め建築現場を転々とする。

1991.10頃 (33歳) アパートの家賃が払えなくなり、結核病院跡の元病室に引っ越す。この時期に、通常であれば一度起きても人生の大事と思われる出来事がいっぺんに（指折り数えたら）八つ訪れる。この頃より体調を崩し、精神的限界に追い込まれて行く。

1992.1頃 …宇宙の“闇”に消し去られて行く自分と、そこに現れた“光”の内的体験をする。

同時期 油彩画3点が、当時人気のロックグループ [T・BORUN (ティーボラン)] のコンサート [東京・大阪・名古屋]会場にてオープニングに起用。(三男“将孝”、[舞台監督]の紹介による)

同時期 自己の崩壊を恐れ、現実逃亡を試みるが…現実という逃れられぬ現実を思い知らされ途方に暮れているところを、U氏に呼び戻される。

1992 氏の世話で、コック兼店長として働き出すが店は閉店に追いやられる。
借金返済のため、コックとして栃木へ転居。油彩画を中断する。

1992.8 ~1993 通勤の最中に、持っていたオイルクレヨンでスケッチを始めると、それまで部屋の中に籠もって半ば戦いのように制作していた時とは違う、スケッチの魅力に目覚めて行く。
この頃、帰省の折に平戸市生月島に初めて訪れ、その自然の美しさに感動する。

1995.11頃 (37歳) 借金返済終了、退社。(この時背中から羽根が開くのを感じた)

1996.9 (38歳) 自分自身を確かめるために、初冬の北海道へ向かう。この時、初めての北海道での初めてのテント生活でありしかもたまたま冬に向かう時期であった。

同.10 この旅の最中に、キリタツ岬にて、水平線～地平線にかけて360度の空全体を包み込む虹を見る。…自然界の色彩とは、此处に現れている虹の色によって織りなされているに違いない……と直感する。

この旅を通して、画家として生きることを決意する。

持ち金尽きてそのまま帰郷する。

“ルドルフシュタイナー”著『神秘学概論』との出会い。

- これまでに、自分の身の周りに起こった様々の苦い出来事には、それに繋がる自分の問題があることを識る。
- 同.12 自然界の色彩の探求を始める。
…この頃、二度目の生月島へ渡り、ギャラリーを夢見る。
- 佐世保市・島瀬美術センターにて、初のオイルクレヨン画による展覧会〈北海道放浪スケッチ展〉を開催する。
- 1997.5 自己認識に至る物語《虹の階段》著。以後、画家を生業とする。
この頃、自然界のあらゆる空間に（自分自身の中にも）浸透している虹の姿を視る。
虹の色を重ね合わせて、様々に油で潰して行く方法を試みる。
- 佐賀県有田町 “おおた、”にて個展開催。
- 同会場にて個展の際に、メルヘン物語《花咲く風の贈り物》著を発表。
- 1997.9 生月島で出逢ったT氏（後、仲人になって頂く）より、島の最北にあった廃屋を紹介して頂きその地にテントを張り、夏場だけのテントギャラリー [風の境界]をスタートする。
- 1998.6
- 同.8（40歳） 佐世保市内にて個展
- 阿蘇・高千穂・日向を野宿しながらスケッチして回る。
[日向 新しき村]の “M御夫婦、”との出逢い。自然と調和しながら生活されているその美しさに心打たれ、人間の理想の生活を夢見る。…またその旅で出会う、自然の奥深さに触れながら、様々なる自然からの贈り物を識る。
- 同.10
- 1998.10～12 自分の描くべきモチーフが、自然の奥深くに隠れ潜んでいることを痛感する。
- 福岡・天神の [ギャラリーSEL]にて〈阿蘇・高千穂・日向を巡る展〉開催。
- 生月町博物館 [島の館] にて〈生月・楽園の地上展〉開催。
同じ頃、妻との出逢い。
- 1999.2 生月島、二年目の（夏期のみ）テントギャラリー開催。同所にて日曜スケッチ会を開始。
- 同.7
- 同.8 [日向 新しき村]のM氏さん、そのご友人のS氏さんとその息子さんを始めとする日向の皆さん。妻の両親や島で出会ったT氏さん御夫婦にS氏さん御夫婦 他（私の両親）いろんな方々のご協力を経て、島の最北の地に捨て置かれた廃屋の大改修を行い、住まいとする。
- 同.12～ 結婚。
- [生月町博物館・島の館]にて〈生月・楽園の地上展－VOL 2－〉開催。
島の小学生を対象に [夏休み子供スケッチ会]開始。（オイルクレヨン画）
- 2000.4
(41歳) テントギャラリーでは絵を傷めるため、スケッチ会を主体とする “場、”としてギャラリー

- 同.7 一の在り方を見直す。
- 2000.8 [日向 新しき村]武者小路実篤、旧居復元工事を記念する展覧会用のスケッチのために村へ。
- 同.10 〈日向 新しき村展〉へ出品。
娘生まれる。
- 同.11 一般向けの出張スケッチ会（春・秋）を [福岡・佐賀]にて開始。
出張スケッチ会に [長崎・佐世保]加わる。
- 2001.5
- 2002.5
- 2000年以降～2008年まで福岡・佐賀・長崎・佐世保を中心に（その他、宮崎・熊本・鹿児島・広島も含み）年平均10回以上の展覧会を開催。また一般向けのスケッチ会（春・秋）及び、夏の子供スケッチ会は2016年の現在まで毎年開催している。（全てオイルクレヨン画）
- 2002.11 生月島初の天皇皇后両陛下御来島の際、ご休憩場所である [島の館]館内各所に作品を展示して頂く。
- 2003.9 描法上の様々の試行錯誤を繰り返す中で、自然の色の持つ深さや透明感とは、パレット上で混ぜ合わせた虹の色が濁るのに対し、自然の中では、色は互いを理解し交わること
でそこに深さと透明感を生み出す……こと、と識る。
虹の色を重ね合わせ油で潰す独自の描法を [虹彩法（こうさいほう）] と名付ける。
- 2004.3頃
（45歳）
同.6 この頃より、基底の紙に [手漉き和紙]を用いる。
生まれ故郷である広島市内にて〈ギャラリー てんぐスクエアー展〉開催。
- 同.9 佐賀県大和町〈画廊 杏風路舎展〉にて絵とピアノ演奏・S氏と自作の詩の朗読とのコラボレーションを試みる。
同じ頃、TV [窓をあけて九州]の取材・放映。タイトル [ウルトラマンになれなかった男]
- 同.10 熊本市内での〈ギャラリー キムラ展〉の直後 [窓をあけて九州]を見ていた熊本のギャラリー [アートギャラリー・モトカワ]オーナーの本川氏より作品を取り扱いたいとの申し出を戴く。有り難く願います。
- 2005.5 自己の追い求めていた [Love composition]とは、`虹の構成、そのものであったことに気がつく。

長崎市内 [コクラヤ画廊展]より〈虹彩クレヨン画展〉とする。

2005.6 1996年の北海道スケッチ旅行中に出合った虹の体験以来始まった色という問題への取り組みは…さらに遡れば東京で初めて開いた展覧会の折戴いた、あの痛烈な一言から始まった問題は、自分の中で一つの世界観となって広がって行った。
その思いを綴った小冊子《虹彩法（虹の贈り物編）》著。

【KOOSAIHO 虹の色彩論】

（以降、長崎県内の各TV局より取材・放映頂く）

2005.8 佐世保市教育センターより依頼を戴き（中学時代の恩師の紹介による）小学校図工教育の一環として [虹彩法クレヨン画]の実演講習会を開催させて頂く。（佐世保市内の小学校教師120名余り参加戴く）

その後、平戸市内の多数の小学校教師の方々にもお集まり頂き、同様の講習会を開かせて頂く。

2009.8 生月町博物館・島の館にて、10周年（11回目）を記念した展覧会を開催。

絵の収入による生活が出来なくなりアルバイトを始める。

2010.1

友人より戴いたパソコンにより、ホームページ制作に取りかかる。

2011

2011年現在、平戸市生月町の最北端の地に再び、スケッチ体験の出来るギャラリー [風の境界]を準備中。オープンの暁にはホームページ及びブログ上にてお知らせ致します。

2017年現在もオープン未定です。

2023 仕事を辞めて絵描きとしての活動再会。

2025.5.10 念願だったギャラリーを、「創造ひろば・にじいろ灯」として生月島最北端にオープン。

※ 【 】は、ホームページ内に掲載いたしております。

以上